

昭和二十八年五月十五日発行(毎月一回・十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

(通第五十号)

目

教 と 時 と 人……………花 田 正 夫…(1)

聖 人 に 親 炙 し て……………池 山 榮 吉…(5)

次

無 辺 の 慈 光 を 浴 び て……………松 尾 友 雄…(11)

慈

光

第五卷

第五號

佛滅後千五百餘年、末法の時期に、道綽禪師は支那の并州に誕生されました。御年十四で出家せられて涅槃宗に入り、ひとすぢに學問と修行を励まれたのであります。學徳次第に世に聞えて、涅槃經の講説もすでに二十四遍に及ばれ、そして御年も五十に近づかれたのであります。

然し禪師御自身のやすらぎとすくひの道がひらけず、うつろの心を抱いて各地に高僧知識を訪はれたのであります。が、何ひとつ得られないでことごとく空しいと云ふ始末でありました。

地上によい知識にめぐりあふことの出来なかつた禪師の胸中に、常に追慕し、恒に去來して、やまぬ師があらました。それは御入滅後すでに七十年も経られてゐる、曇鸞大師であります。流転漂泊の子の心が郷里の親の家に帰るやうに、禪師の御足は自然に大師の古寺、玄忠寺に向つたのであります。

古刹すでに苔むして、大師の温容は寂滅の煙と化し、德音は松風に障へられてゐたことでありませうが、大師をひとすぢに慕ひまつる禪師の心は、全身が目となり、全身が

終られた禪師は、

「和尚の大徳、なほ四論の講説を捨てて、他力淨土門に入り給ふ。余が如き小子、何ぞこれに帰せざらんや」

と慚愧と隨喜のあまりに覺えず独白せられると共に、終生日、七方の念佛を相説せられたのであります。私自身かく表白せられずには居られなかつた禪師の心底に心を深く潜めます時、亦涙無しには居られないのであります。

山中古刹の庭上、苔蒸す一片の古碑に、星霜七十年を経て、曇鸞、道綽の両師は、相ひ遭ひ、相ひ語らうて、久遠の大法がここにひかりを放つたのであります。和尚はかくて誠実な伝承者を見出し、禪師はそこに凡夫往生の大道を見出されたのであります。

爾采禪師はひたすら念佛の中から、一切老少善惡の道俗を導かれ、觀經の講説も実に二百回に及ばれ、念佛の音が四方の林や谷にこだましたと伝へられてゐます。

禪師はとくに、教と時と人と云ふことを、大切に説かれて、末代濁世の我々凡愚に大きな道標を建てて下されたのであります。

道綽禪師の勸化

「世尊を去ることすでに遙かに遠い上に、自分の智解は

身となつて、大師の徳化を求められたことでありませう。ねむごろに香華を手向け、誦經を終へて、涙をたたへて仰ぎ見る禪師の心に、やきつけられる如くに写つたのが大師の碑文でありました。

曇鸞和尚文碑

「法師つねに淨土を修したまふ。また世俗の君子ありて來つて、法師を呵して曰く。

「十方佛国みな淨土なり。法師なんすれぞ独りこころを西にそそぐや。あに偏見の生ずるにあらずや」

と。法師こたへて曰く。

「吾すでに凡夫、智慧淺短なり。いまだ地位に入らざれば念力なんぞひとしくすべけんや。草を置き、牛を引き、つねに心を槽檻にかけむが如し。あに縱放にして、歸するところ無きを得んや。」

復た難ずる者紛々たりと雖も、法師ひとり決し給ふ」

恭敬合掌の御姿で、身心共に吸ひつけられる思ひで読み

まことに短少である。徒らに自己の力を頼んで佛意を得ようとすることは、恰も短い釣瓶をもつて、深い井戸水を汲まうとする愚さに等しい。また、時がすでに末世であることを顧みないで道を求めることは、徒らに濕つた樹木をこすつて火を求め、或は空しく乾いた薪から、水を求めるやうなものである。これを、久しうするも得ることは出来な

い。淨土念佛の法門こそ、末代の時期に相應し、凡愚の我等に適當した、悪人成佛、凡夫往生の大道である。たとひ一生造惡の身も、その者をこそたすけんとの「称我名字」の願、「若不生者」の誓ひまします」

禪師が心血を傾注して、觀經の玄意を御説き下さつた安樂集には、一生造惡の我等凡夫にこそ、彌陀佛の弘き御誓ひまします。ひとへに念佛ひとつを頂いて行けば、罪深く障り多い身も必ず眞実のさとりの世界に入ることが出来ること懇切丁寧に御勧め下さつてゐるのであります。

曇鸞大師の碑文に心うたれ給うて「余が如き小子」と崩折れられた禪師は、一生浮ぶ瀬のない凡夫であると自照せられて、念佛七方の行者と転じ給うたのであります。この禪師の御信証が、やがて、我先だたば人を導き、我おくれ

なば人に導かれて、世々に善友となり、生々に知識となりて、永く迷執を断たん、との常行大悲の徳光として、現に我々を照して下さるのであります。

念仏七萬といふこと

道綽禪師は称名七萬遍と伝へられて居ります。御弟子善導大師は三十年間横臥せられず念仏十萬と伝へられ、法然上人も亦六萬七萬の念佛者でありました。

さて試みに一秒に一称の念佛といたしまして、二十時間七萬二千になります。して見ますれば六萬以上の毎日の念佛者の御口は、常に半開きで、寝ても覚めてもへだてない、常念佛の方であつたと想像申すのであります。出るも入るも念佛の息、起きるも臥すも念佛の中と申すべきであります。

明治の初期に非常な念佛の感化を及された方に、博多の七里恒順師が居られます。師は常に

彌陀大悲の誓願を、深く信ぜん人はみな、寝てもさめてもへだてなく、称名念佛はけむべし。

との御和讃と、

彌陀佛の本願を憶念すれば、自然にその時必定に入る。唯能く如来の号を称して、大悲弘誓の恩を報ずべし。

人は特別な方で、我等の分ではないと考へ勝ちなのであります。果してそれでよいのでありませうか。

親鸞聖人も、蓮如上人も一日の念佛の数は挙げられてありませぬが報謝の念佛は、「寝てもさめてもへだてなく称名念佛すべきものなり」と、明らかに勧められ、数を記する用事のないまでの念佛御相続の姿を随所に拜することが出来るのであります。

私はここに、道綽、善導、法然の三聖の行住坐臥、常念佛の尊容を拜し、その信界流出の念佛の本源が、たずかるべからざる一生造悪の衆生、現に罪惡生死の凡夫、十惡愚痴の法然、その者をこそ必ずたすけ逐けんがための本願まします、念佛ましますと、釈迦彌陀二尊の、慈悲方便の真心、徹利して、止めんとして止むべからざる報恩の念佛ましますことを、身にしみて感佩申すのであります。

もとより、眞実の信心には必ず名号を具することであり、称名は必ずしも信心を具すとは申せませぬ。裏から申しますれば、称名さへして居ればよいと云ふのも間違ひでありますと共に、信心さへあれば念佛は用事はないと申すのも間違ひであります。

との生信偈の龍樹章を常に讃仰せられて、念佛相続を大切に勧められた方です。

或時、某氏が七里和上に「ねてもさめても申されませんが、起きて居ります間なら、どうか努めますれば念佛も申されませうが、寝てからの念佛はどうしたらよろしいでせうか」と、おたづね申した時、「お前は寝てからの心配をするよりも、起きて居る間の念佛を絶えぬやうに工夫しなさい」と、答へられて、二の句が出なかつたさうであります。

其後、或日某氏が京都の本山にお参りして宿につきますと、幸にも隣が和上の部屋であつた。其夜のこと、深更まで隣室で息をこらして様子をうかがつて居ると、お念佛の声と和上の寢息とが交互に混じつて聞え、ねても、さめても、と御教化下さるのはこのことであつたか、と和上を疑つた罪と、寢息までが無意識中に念佛となつて居られる尊い御教化を被つたさうであります。

信心信心と、力説せられる方は念佛を軽視し、又念佛念佛と申される方は信心を軽視し易いのが、相対分別智の我々の通弊であります。このところは、聞き間違つてはならぬところでありませう。

相当熱心に聞かれて居る方でも、六萬七萬の念佛と、聞くと、その数に驚いて了うて、さう云ふことの実行出来る道綽禪師が曇鸞大師の碑文を仰ぎ、愕然として驚き、忽然として念佛門にころけ込まれ、爾來八十四の御高齡まで七萬六萬の念佛裡に、一切道俗を感化せられ、且つは稀代の高僧善導大師もその門下から輩出せられてあることに、思ひ到ります時、信即行、行即信の、禪師の信仰の生活を仰ぎ、省みて我身の放逸無慚の姿恥づべく痛むべきの限りでありますことを、いよいよ、照し出されることでもあります。



聖人に親灸して

池山榮吉

信仰は若いから得られない、老人だから得易いといふことはない。男女老少を問はず信仰は得られる。しかもまた得にくいものである。私は皆様に、お尋ねしてみたいと思ふ。

皆様は真実の信仰を得られておいでですか。皆さんは開祖、親鸞聖人にぢかにお会ひになつたことがありませんか。

聖人は七百年前の方だからお会ひできないと言はれるのはもの足らない。是非お会ひしなければならぬ。

信仰は、信する人とお会ひするといふことである。信仰の道を辿つてゐる以上は、一度は聖人にお会ひしなければならぬ。さうでなければ信仰は得られない。では如何にしてお会ひできるかをお話してみませう。

歎異鈔の第一節を先づ拜読ませう。

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛申さんと、思ひたつ心のおこる時、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。彌陀の本願には、老少善悪の人をえらばれず、ただ信心を要

の衆生を助けんがためである。だから罪悪深重、煩惱熾盛の自分に苦しむ人は、会ひたくて仕方がない。言葉通りそれだといふよりも、その言葉に盛り切れぬほどに罪悪深重に苦しむのである。

さう考へると聖人にお会ひなさつたかといふ間は、あなたは自ら罪悪深重、煩惱熾盛といふ見極めがついて居られますか、と言ひかへる事が出来る。如來は吾々に信仰を興へたくて仕方がない。だが如何せん、吾々の方で欲しがつてゐないのだから獲られないのである。

それで今度は、吾々人間は、どうしてもさうした自覚を餘儀なくされるものであることをお話しておきませう。

私が聖人にお会ひしたその體驗から割り出してお話いたしませう。

我々は常に満足を欲求してゐる。然るにいつも満たされない望があつて、それが叶はぬ。そこから苦しみが起る。一生もがいて努める。どうぞ自分の望を叶へたい。満足を得たい。我々のすること、なすこと皆この欲望から来る。その外に何も無い。

金が得たいと云ふ人は、一生懸命にそれを求める。そして運よく金を得る人がある。名の知られた人となりたいたい。それもうまくゆけば、かなり有名にもなれる。

とすと知るべし。その故は、罪悪深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にたまします。

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまさる善なき故に、悪もおそるべからず。彌陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故にと云云。

「その故は、罪悪深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にたまします」第一節を拜読すると、胸にピンとくるのが、この一句であります。これが即ち、彌陀の本願、本来の御願である。

さて吾等が親鸞聖人にお会ひしたいといふ希望がどうして湧くのか。別にこれといふわけもないが、信仰を獲ておいた方がよいからといふのではつまらぬ。それでは信仰を興へたくとも、興へやうがない。何が得られなくとも、先づ信心が獲たいといふまでに願望が熟して来なければ駄目である。

七百年前の聖人に会ひたい？これは奇蹟である。何故に会ひたいのか。もともと彌陀の本願は、罪悪深重、煩惱熾盛

其他、地位を得たい、権勢が得たい、いづれも、ある程度まで得られましょう。併しそれらが得られて満足しきつて居られるか。かつて自分の望んだことを得て、それで究竟の満足を得てゐる人があるか。

中には眞の満足でないものを、満足だと自ら欺いてゐる人もある。正しい方法によらないで、満足を得たといふ人は大抵これである。

普通の満足と、もう一つの満足をくらべてみる。

自分をよりよくしよう。外のもので自分を飾らうとするのでなく、自分の人格をよくしようとする。さういふ満足と、前の満足をくらべてどちらが貴いものであらうか。

人も二十歳前後にもなれば、幾分さうした問題を、經驗的に考へ始めるものである。

金や地位よりも、自分の人格が向上してゐるといふ満足を感ずるに越した喜びはない。これはほかのものと到底くらべものにならない。

人格の向上を実現することが出来たならば、自分の欲するままに善でありうるやうになれば、これに越した眞の満足はない。其他の満足は従たる満足である。内なる自分をよりよくするための手段としてのみ、外なる満足は意味がある。間接に内なる満足を得るに役立つ、といふ点だけで

価値がある。

昔から道を求めた人々は、自分を一步でも佛の境涯に近づけたい。といふのが根本の願であつた。内なる満足を求めるときのみ始めて人間としての道を歩むのである。

親鸞聖人はそれを専ら求められたのである。ところでそれがうまくゆくかといふのが問題である。

歎異抄の第二節に

念佛はまことに淨土に生るるたねにてやはんべるらん。また地獄におつる業にてやはんべるらん。総じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄に墮ちたりとも、更に後悔すべからず候。

その故は、自餘の行を励みて佛になるべかりける身が、念佛を申して地獄におちて候はばこそすかされたてまつりて、といふ後悔も候はめ、いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみ家ぞかし。

とある。聖人は向上の一路に専心、こころをはげまされたけれども、とても登り得ない道であつたと、遂に「とても地獄は一定すみかぞかし」となれば「まことによくよく煩惱の興盛にさふらふにこそ」とあきればてられたのである。

眞の満足を求め進んで、それがどうしても、到達出来な

らぬ人を礼拝されたのは、人がさう云ふ心を持つてゐるからである。

人格を向上したいといふ願は、本当に貴いものだ。吾々と佛陀との間には五十三段もの階段があり、非常なへだたりのあるが、いつか一度は佛に辿りつく可能性がある。それが貴いのである。如来が吾々を救はうとされるのは、吾々の「無力であるが不滅の願」としてのよりよくなりたといふ心を手がかりとされるのである。一切衆生悉有佛性とほこれである。

それから、信仰を獲るのに絶対に必要とまでは、純理の上からはいへないかもしれないが、事実上さうでなくてはならないのは、善知識に会ふといふことである。

信仰上、絶対的に信頼し得る人を獲る事である。その善知識は現に生きてゐる人でもよい。貴方がたの中の一人が善知識であるかも知れぬ。又百年前の人でもよい。三百年前の信者の言行に感じて、その人が善知識になるとしてもよい。

私の善知識は誰か。私を信仰の方へ近ませくれたのは、母や、友人、あの近角常観といふ人などであるが、信仰に引入れて下さつた直接の人は、七百年前の、親鸞聖人である。

い。そこで始めて罪惡深重、煩惱熾盛の衆生といふことがわがこととなるのである。眞面目に人生を渡らうといふ人は、おそかれ早かれ、そこにぶつつからざるを得ない。

人に出会ふ度に礼拝された人がある。常不輕菩薩といふ方である。その人はどこを見てさうしたのであらう。例へば私が人に対して、さうすると他から見れば狂人のやうである。石には精神があるかないか分らないが、恐らくないであらう。鳥、鳥にはありますね。私が神戸の御影に住んでゐた時分、カナリヤを飼つてゐた。私がそばへ行くとチユウチユウと嬉しうに鳴く。はてなと思つて近づくとさも嬉しうに、ピョンピョンピョン跳ね廻つて鳴く。私は餌をやつたことはないが、私に対して親しみを持つてゐる。私も可愛い奴だと思ふ。心と心とが、通ふのである。

かつて猫のお話をしたことがある。猫にも心がある。犬にも尙更である。併しそれらはあれが欲しい、これが欲しいといふ願はあるが、心をよくしたいといふ願は、人間にしかない。此の心があるので始めて人間である。地位、金を願つてゐる人は、人間の人間たる価値がない。

人間としての眞の価値は自分の心をよくしたい、佛にまで近づきたいといふ心がある点にある。常不輕菩薩が、あ

七百年前の人にどうして会へるのか。

私は貴方がたに質問します。貴方がたは人間を見る事が出来ますか。出来るといふ人はまだ人間を知らぬ人です。

人間は眼に見えるものではない。鼻があり、口があり、しかじかの形をしてゐる。それは人間ではない。或事を感じ、欲し、考へる、それが人間である。人間の形は人間ではない。人間の考へ、それが人間である。

七百年前親鸞聖人の前に坐つたとしても、聖人を拜める人もあるし、拜めない人もある。聖人の御心の幾分を解し得て、さうでしたか、私もさうさせて頂きますか、となれた人が聖人にお会ひ出来た人である。

七百年後の今でも、心と心と通つて、ぢかにお会ひできるのである。信仰の上で心と心と通ふ。それが信仰である。聖人を通じて、法然、善導、龍樹、釈尊、久遠の彌陀と心の通ふことが信仰である。

しからばどうしてお会ひしたか！

私は元來偏屈にできてゐる。疑ひ深い。意地が悪い絶対に人を信ずるといふことが出来ない性分である。若い時分から英雄崇拜などということが出来なかつた。ところが妙なことに、宗教というものは、馬鹿に出来ぬと考へてゐた宗教の中でも、佛教、佛教の中でも、殊に眞宗の信仰が最も純粹で、すべての信仰を、つきつめていつた最高のもの

という考へは動かせなかつた。他の事には、擬ひ深かつたが、真宗の信仰の体現者は親鸞聖人であり、聖人がその信仰を体験されたままに述べられたのである。といふことは疑へなかつた。

私が出たくなかつた念佛が出たのは、四十二歳の時である。私の行詰りは、善悪の問題であつた。人に依つては種々あるが、私にはさつきの善悪の問題である。或事で自分がよくなりたと思ひつつ、どうしても、よくなれなかつた。悪いと知りつつどうすることもできない。私は自分の心を自由に出ることが出来ない。こんなことでは目的の果しやうがない。

目的のない人生、これほど淋しいものはない。自分はとうしたらよからう。何のために生きてゐるのだらう。五里霧中、全く足を踏み立てる所がない。生きてゆかれたものではない。

私はその時、信仰が欲しいな、と思つた。どこにも光が見えない。まつくらがりだ。切に信仰が求められた。

その時である。歎異抄の第二節の「親鸞におきては」の御文を思ひ浮べた。それまでに、読んだり聞いたりしてゐたが、体験的に、さうだな、と思つてゐなかつた。その御文は

づくまつてゐた念佛が土堤の切れたやうに、高らかに、なだらかに申され始めた。その時始めて親鸞上人の御心がわかつた。わかつたのは「ああさうか」といふことである。

さつきカナリヤのお話をしたが、カナリヤが私を呼びかける。私はカナリヤが私を呼んでゐるなど感じる。これが感入である。皆様のうちで、大変真面目に聞いて居られる方がある。喜んで聞いて居られる方がある。私の方で、あの人は真面目に聞いてゐられるな、あの人は喜んで聞いて居られるなど感ずる。心と心とが通するのである。

ちや死んだ人とはどうか。死んだ人は、多くの場合、言葉そのものがその人である。その言葉を聞いて、「ちや私も」とその言葉を真似するのである。その言葉の中に這入るのである。それで與へられるのである。

聖人のお心が私の心になり、逆にまた妙な言ひ方ではあるが、私の心が聖人の心になる、感入であり、共感であり、共鳴である。

「ただ念佛して」いかにもさうですね。煩惱熾盛、罪悪深重の衆生をたすけたための願でしたか南無阿彌陀佛となる。念佛の出ない人は御用心なさい。しかし念佛が出たからとて、信心を獲たのでないかも知れぬ。聖人の御心が私の心となり、私の心が聖人の心になると念佛せず居れなくなる、不思議なものです。

親鸞におきては、ただ念佛して、彌陀にたすけられまいらすべしとよきひとの仰を被りて、信するほかに別の子細なきなり。

である。よきひと、即ち善知識である。それ、ここに信仰にはいる猷立がちゃんと出来てゐる。己の何ともならぬ身といふこと。そして又「よき人の仰をかうむりて」といふ善知識の準備ができてゐる。聖人は私にとつて唯一無二の善知識である。

私は、その御文に、ぐつと引きすり込まれるやうに感じた。その途端、ああさうか、と大いに感得したことがあつた。

聖人は「親鸞におきては」と言つて居られる。「親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰をかうむりて信する外に別の子細なきなり」と云つて居られる。「あなたはさうでしたか。ちや私も」この骨です。この心持であの御文を味はれば、現前当来遠からず、必ず聖人を拜見できます。

「私におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よき人、親鸞聖人の仰をかうむりて信する外に別の子細なきなり」と読みかへ、如何ともすることの出来ぬ善悪問題の最中に聖人もさうされたのか「ちや私も」と大きな受け容れの心がひらかれると共に、今迄喉元でう

聖人を真似るのに二通りの仕方がある。一つは聖人が佛前で、如何にも度ましく合掌念佛して居られるとする、その御姿を真似て自分も合掌念佛する。これは外的の眞似方である。「ただ念佛して」といふお言葉を頂いて、自分も聖人と同じ心で念佛する。これは内的の眞似方である。

ところが、外的の眞似をして居れば、いつか内的の眞似も出来る様になる。このことに就いては、もつと詳しくお話ししたいが時間がないから次の機会に譲りませう。心理学の上から云つても、絶対に信頼する人の判断は、そのまま自分の判断となり、その人の希望は自分の希望となるといふことは動かせない。

聖人を絶対に信頼すれば、自ら自分の中は、空っぽになる。その人の考を聞かして貰ふと、それがそのまま自分の考となる。斯くて始めて聖人にお会ひ出来る。

聖人にお会ひすることは、法然、善導、天親、龍樹、釈尊にも会ひ奉ることであり、現に如来を拜見することである。願はくばすでに信仰を獲られた方はしばらくおき、未信の人は是非聖人にお会ひしていただきたい。お会ひするには「ちや私も」とか「私におきては」など、上に述べたことが参考になるでせう。

「親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰をかうむりて信する外に別の子

細なきなり」といふのは、聖人の単なる信仰の告白ではない。単なる独り語ではない。「私はかう信ずる。諸君もかうしてはどうかかな」とお勧め下さつてゐるのである。これは最近氣付いたことである。信仰の告白には、一種異常な力がある。それは痛切に感入を促す。だから二節のこの御文は獲信の上に絶大の加威力を有する。あの御文は聖人が熱い思ひを籠めての、御すすめであるといただかねばならぬ。

無邊の慈光を浴びて

七百年前から、悲心切々として呼んで下さつた御声に氣付かなかつたのは、私共の求め心が、切実さを缺いてゐたからである。どうぞ一刻も早く、ああさうだつたかと、共鳴同融せられるところに、落着いて頂きたいものであります。

(昭和六年一月、芦屋会館講話)

松尾友雄

私は大分県に生れましたが、私の郷里では寺の法話会には老若男女を問はず、そろつて聞くといふ良い風習がありました。国を離れてもう長年経ちますので、敗戦後その習慣は崩れたかも知れませんが、私には有難い環境に育つたことだと喜んで居ります。

寺の御住職も立派な方でありまして、月々御自身で法話をせられ門徒の者もこぞつて参詣すると言ふ具合でした。

御住職は先づ勤行を終られると、高坐に登られ、しばらくの間は念佛ばかりをせられて、「お念佛のころはわかつたか。わかつた人々は早く家に帰つて仕事をしなさい。

しました。すると不思議にも専門の書籍を読んでゐる時は心がやすらかになるので、何処に行きますのにも、書物を懷中から放さぬといふ様にいたしました。電車に乗りましても、書物を読んでゐないとすぐ心が暗くなり苦悶が続くのです。

ところが宿善の催しとでも申しませうか、或日電車に乗りましたが、其日に限つて書物を忘れてゐたのです。サアさうなると電車の中で、又しても信仰問題が苦になり始め、どうせう、どうせうになりました。然し手のほどこし様もなく、ただ崩折れるばかりでありました。さうした苦悶の底に落ちました刹那に、南無阿彌陀佛と念佛が出たのです。引き続き二声、三声、念佛が出たのです。その時でした。御住職の「わかつたか、わかつたか」と高坐の上で常に申された姿が、眼前にチラツクと共に「アア、これだつたのか」と氣付かせて貰い、それから心が大いにひらけて、念佛が自然に唱へられるやうになり、信仰問題が苦にならなくなりました。

戦争中は南方の執政官を命ぜられ、あちらで敗戦となりましたので、捕虜として長く收容所に留められました。友人も一緒に居りましたが、次から次へと、毎日の様に呼出されて処刑せられると言ふ状態で、私も今日か、今日かと云ふ切迫した氣持で過しました。そうした時の精神の消耗

わからぬ人々は残つてよく聞いて下さい。」

と法話の始めに何時も口癖のやうに申されてゐました。

只今もなほその御住職の「ナムアマダブツ、ナムアマダブツ。わかつたか、わかつたか」と云ふお声とお姿が、深く心に刻まれて居ります。

其後に郷里を離れまして東京で勉強して居りました頃から、信仰問題がどうしたにか苦になつて苦になつてなりません。独りでいくら考へても解決の道もなく、さういふことばかりしてゐると、學問も出来ないの、信仰の事は暫く考へまい、兎に角専門の學問を続けようと決心

は身をすりへられる様なものであります。その為友人の多くはひどい營養失調やら熱病やらで不婦の人になりました。

私は幸にお念佛を申し、申し、收容所で草履を造りました。それは不足な食糧事情の下で、それをすこしでも補給するために、海岸まで食物を探りに行く人々に、海辺の岩についたカキで足を痛めないために草履が重宝がられたのです。

然し電灯もない收容所に居りまして、一切の文化生活から切り離された裸の人間といふものが、如何に弱々しい存在であるかと云ふことをいやといふほど知らされました。毎夜、夕暮時に飛び廻るコウモリにも人間の視力の弱さを省みさせられ、如何にも軽快に飛び交ふ、ツバメにも自分の無力さ、翼のない身を哀れみました。それと申しますのも、何一つ頼みのない一日一日が、死と直面して居る生活で、遙かに、母国にあつて種々と案じてくれる肉親の者を想ふ時、小鳥の持つ翼も非常な魅力となるものです。かうした境遇にあつてひどい營養失調にもならず、無事に帰国出来ましたのも、お念佛によつて、無限の慰安と力とを惠まれた御蔭だと有難く思うて居ります。

(廿五年 秋日)

私は毎朝、御飯の出来るまで約一時間、東大寺の大佛殿から二月堂にかけて、念佛三昧で一週するのが恒例になつてゐます。これは一年半程前、聖武天皇と、光明皇后が毎朝、平城京から御参拜に御出になつて、私の住む前の道路をお通りになつて居られたといふことを或人から聞き、私は東大寺の境内に住みながらも詣りもしない横着さを感じましたことと、私の体質は運動を適当にしないとけないと奈良医大の院長から注意され、毎朝三笠山へ登れと勧められたことから、前記の朝の行事が始つたわけです。今日では出張中でない限り、雨の日も雪の日も、所謂病みつきになつた調子で、早朝の清浄な境内を念佛三昧で佛様にお詣りさせて頂くわけです。毎日、毎日果の森林組合の仕事や、其他の雑務で忙しい生活を続けて居ります私には、この朝の一時間が一番楽しい時間で、多くの快感がこの時によく現れてまゐります。ここではその幾つかを述べさせていただきます。

私は近頃、世の中のすべてが、森羅万象ごとくが、無論社会事象までが、佛の大きな慈愛の顕現のやうに思はれてなりません。勿論、私自身は浅ましい心の持主で、呆れ果てては御慈悲を喜ばせて貰つて居りますが、外界のすべて、私の能力及ぶ限り、知識で感得出来る限りは、悉

然りであらう。大地の土塊も砂礫も、山川草木その例外に洩れるものはあるまい。

唯人間は夫れを無視して、自己の欲望ばかりに終始して夫れが成功すれば喜び、之れが、不成功に終れば愚痴になり、腹立ちとなる。何処までも迷ひ續けて居る。哀れなものである。全く値打無し私である。所が有難いことには人間に生れた所詮があつて、偉大なる永遠のみ親の心が、私の心に溶け込んで、み親の永遠の生命が私の生命となつた。何と何と、広い豊かな親の懐かな。

念佛は、親の乳である。親の血潮である。親の生命である。声高らかに御名を称へん。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。私は常に南無阿彌陀佛を佛のオツパイ、母親の子に對するお乳と味つて居ります。母が大きなオツパイを子供に與へる。母の慈愛のすべてがこのオツパイになつて子供はスクスクと育つてゆく。子供は何も判らぬ虫同様で、全く独りで育つ能力を持たないが、母親の全面的な哺育によつて血となり肉となるオツパイによつて育てあげる。子供が勢よくオツパイを飲んで満腹顔に眠つてゆく姿を見て母は満足氣に慈悲のまなざしで微笑む。あの姿。私は佛の南無阿彌陀佛のオツパイをトクトク飲んで育つてゆく。佛は喜びのまなざしで、私に南無阿彌陀佛のオツパイを與へて下さる。私にはこのオツパイが無くしては一日として生きて行けない。そのやうに味つて居ります。

南無阿彌陀佛の慈愛のオツパイを頂く所に我々が凡夫がすすくと佛にならせて頂く仕組が整つてゐる。母と子、佛と私に所謂血が通ふ所に泥凡夫の佛に成らせて貰ふ仕掛があるのせう。有難いことです。我々は奇蹟を恃んで佛に

く御慈悲の現れのやうに感じられてなりません。尤も私が浅ましい落着の無い、アクセクとした氣持で居る時は、さうしたことに氣付かずに過しますが、時たま落着いた靜かな氣持で念佛の中で物を見ますと、今まで氣付かなかつた種々のことに、心の眼が開けて来るやうな感じがするので

私にはどうかすると、東大寺の境内がお淨土に見える、いいえ、宇宙がお淨土と思はれて仕方がない時があります。人間と畜生の心の迷つてゐる、狂つてゐる、宇宙、森羅万象の諸法則には微塵の嘘偽がない。眞だ、眞理だ、大徳の眼には此の世が其の儘お淨土として映る。若し人間の氣持が迷から離れて、此の世を直視すれば、眞理そのものの顕現でお淨土に違ひない。私の肉體も嘘偽と矛盾を絶対にゆるさぬ眞理の一駒。斯うした氣持で山川草木を觀みますと、悉く佛の恵みが躍動して、自分はその中に抱擁されてゐるのに氣付くのです。

(廿八年 一月四日)

今朝は殊更に冷いと思つてゐると、正倉院の池からは熾んな蒸氣で湯煙りが立つてゐる。何と規調面なことであらう。此の蒸氣が雲になり、雪になり霜になり、雨になつて大地を潤はす。そしてやがて大海に入り、自然に清い潮となり、宇宙の潤ひを贈ふ。斯くて転変極りの無いまんま不増不減のまことを告げてゐる。ささやいてゐる。万物尽く

なるのではありません。佛様のお乳で育てあげられて佛に成るのだと喜ばせて貰うて居ります。

私は佛と寝起きしてゐると云ふ、それではなほ不十分である。寝起き所じやない。体にも心にも、入り満ちて下さる。併しながら煩惱の雲霧で兎角無明に閉ざされてゐるだけのことである。

死んだ先で佛に救はれるかのやうな錯覚を兎角起してゐる人がある。此の世、現在救れてゐないが死んだ先で救れるなどとちよつとをかしい。佛は我々の五感の凡てから佛の慈悲を注ぎ込んで下さることに懸命だ。一輪の花を見ても、ラチオの音楽を聞いても、砂糖の甘さを嘗めても、冷たい風に触れても、香りのよいお線香の薫りを嗅いでも佛のお慈悲を味ふことが出来る。宇宙の悉く、夫れは佛の慈悲光明に包まれた世界ならざるものは無い。

憂悲苦惱、夫れは無明の人間の感覚のみの世界に過ぎない。三毒の煩惱の火宅に住むお互人間の世界のみの出来事に過ぎない。佛はこれをみそなはされて、哀れと思し召され、やるせないお氣持の一杯に相違ない。因果の糸も乱れぬ道理で仕組まれたこの宇宙人生、この道理を明かに悟られぬ、佛の御眼から観られれば、人間の心の動きは、餓鬼と描き畜生と描き、修羅と描く以外に表現の仕様が無いこととせう。

斯うした心の動きを眺める時、只呆れるばかり、恐入るばかりですが、此の心の浅間しさが故に、佛は御同情下され憐憫下されて、凡ゆる方策で私にお諭し下されて、佛心をやうやくにして、知らしめて下されたわけでありませう。

編集後記

花祭の歌の催しも、選挙の声にかき消されて何時の間にか五月の鯉職を期として初夏の陽が射しが始まりました。三月末に私居の生活におこしまして以来、再び静居の御注意をうけ、友人荒川医師から禁煙の御注意をうけ、遂に思ひきりまして十日を経ました。読書も出来ず、原稿も書けず、牛猫人の癖を續けて居ります。且つと一教と人の癖を原稿を書き終へ、且つは五十号の記念として、池山先生の「聖人に親炙して」を頂きました。又奈良県の森杯組合の副会長をして居られます。松尾友雄氏の御法信を綴りまして、「無辺の慈光を浴びて」の原稿を戴きました。毎朝、それを雨の日も風の日も、奈良市東大寺境内の御家から大佛の二月堂への散策、念佛三昧の御参拜の時間と承ります。松尾さんの法悦の最高潮の時間と承ります。さうした時、何かもの御感じ下された喜びを御報告下されたものであります。

○ 禁煙十日目の私とて、煙草についての印象の深い話を想ひ浮べて居ります。第一は近角先生が独逸留学中の頃、御身体をそこねられて奥煙が悪かつたさうでありました。其時御一緒に遊学中の吉田静致氏に、「煙草はいけなひのだがさうもやまらぬ」と近角先生がつひもらさ

れた時「それはほんとうに悪いと云ふこととがあなたにわからぬからでせう。」とめびしく責められて、爾来ブツツリとやめられたと承ります。爾来ブツツリとやめられたと承ります。爾来ブツツリとやめられたと承ります。

煙草好きで、東京では独逸からの帰国後に徳香舎と云ふ煙草屋まで経営せられたことのある先生です。このころが御晩年に心臓を悪くして居るとは考へられたことが無かつたさうであります。煙草が一本でも半本でも量がすくないと我がことと非常に憂ひ歎いて居られる量が多いと非常に憂ひ歎いて居られるのを知られて、ひとすぢに案じて居られる御心を汲みとられて、いかにもいぢらしきいことであると感得されたと案外思ひ当りよく節煙せられたのであります。申せるものであつて頂けば、案外すらくて居りました。信の味として語つて居りました。第三には七里和上のことです。和上は煙管でスパスマと煙草を喫して居られたやうであります。禁煙の話はききました。せうが、和上が常念佛について、或人に斯もう勧められて居ります。それは、好きなもの有害無益なものと念佛とをまづ交換して行くといふことなすかへだてなく称名念佛はけむべし」といふことになる。

○ 八月まで第一と第三日曜の講話をさせて

頂き、第二日曜は休講いたします。

昭和二十八年五月十日 印刷
昭和二十八年五月十五日・発行

定価 一部 十七円(郵税共)

半年 百四(郵税共)
一年分 二百四(郵税共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八

編集兼 花田 正夫
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 富田 隆

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千種印刷所

名古屋市南区駄上町二ノ二八

一道会館

発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番